

川内原発再稼働は許さない！菊地洋一氏緊急講演会

主催：原発なくそう！九州川内訴訟宮崎原告団

日時：2014年8月30日(土)開場：13:00 開会：13:30

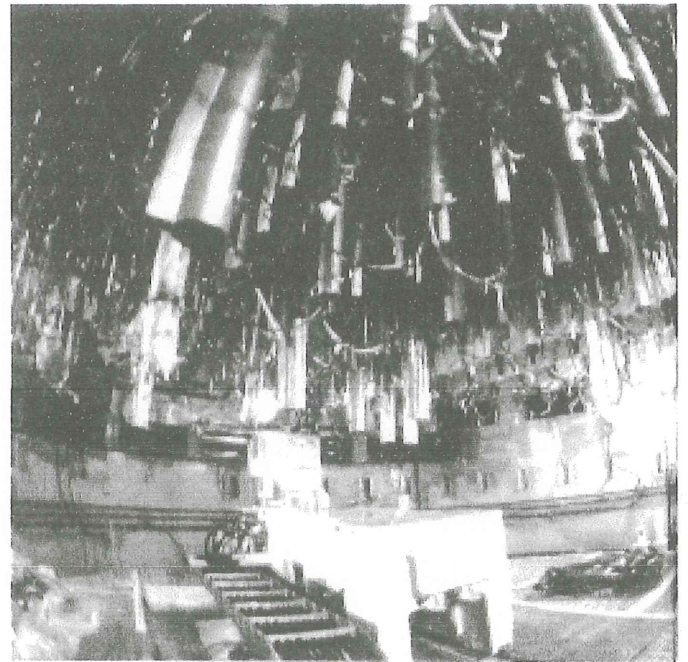
会場：宮崎中央公民館 大研修室

演題：「原発をつくった私が、
原発に反対する理由」

○菊地洋一氏(元 GE 技術者)

(プロフィール)

1941年岩手県釜石市生まれ、61年日大(短)卒業後、建築コンサルタントとして様々な建築設計に携わる。73年3月～80年6月の7年4ヶ月、米国GE(原子炉メーカー大手のゼネラル・エレクトリック社)の原子力事業部極東東京支社企画工程管理スペシャリストとして東海第二原発・福島第一原発六号機の建設に関わる。80年にGEを退社、81年にアブダビで石油関連施設の建設(設計・施工管理)に従事。50歳からは反原発運動に人生を捧げることを決意。各地で講演などを行なっている。



山のように配管配線の絡み合う「配管のお化け」
福島第一原発六号機の原子炉真下の内部状況
広瀬隆著「福島原発メルトダウン」朝日新書P47より

(菊地氏は自身の眼で見てきた原発内部の実態を、こう語ります！)

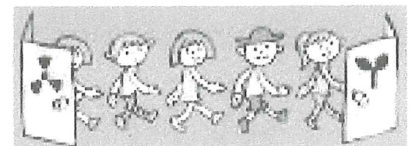
原子炉圧力容器からは、実に様々な配管が出ています。80万キロワット級の原子炉でも450本以上です。それぞれの配管についている弁の数となったら1000を超えます。まるで「配管のお化け」です。原子炉は、この大量の配管を本体からぶら下げています。原子炉と配管はもちろん一体成形されたものではありません。原子炉との継ぎ目の多くは手作業で溶接しています。原発内部はあまりにも多くの重い配管が複雑に配置され、しかも非常に不安定な支持構造しか持っていないのです。同時に、本来想定して計算に組み込むべき要素「地震波と鉄骨の共振」などが考慮されていないうえに、「人間のミス」がいくらかでも入り込む余地がある部分なのです。100%ミスの無い作業は不可能に近い。度重なる設計変更、連絡ミス、身動きがとれないほど狭い場所での溶接作業。いかに原子炉や格納容器が頑丈に作ってあったとしても、見過ごされがちな「配管」こそが危険だと考えていました。

菊地洋一著「原発をつくった私が、原発に反対する理由」より

○川内原発訴訟宮崎弁護団報告

本年5月、原発操業禁止を命じ、全国の原発に衝撃を与えた大飯原発訴訟第一審判決。そしてこの7月、川内原発について新規制基準に適合していることを認めるとした原子力規制委員会。これをうけ9月にも川内原発の再稼働をねらう九州電力。これに対しこの5月に稼働禁止の仮処分を申し立てた原告弁護団。川内原発再稼働問題をめぐって事態は緊迫しています。このような状況下、原告と弁護団はどう闘っていくのか、今何が問題で、私たちは何を指しているのか、宮崎の弁護団が熱く報告させていただきます。

ただ今 6次訴訟の原告募集中
9月5日申し込み締め切りです。問い合わせは下記事務局まで



(問い合わせ・連絡先)

原発なくそう！九州川内訴訟 宮崎原告団 事務局(市川) コープみやざき労組

〒880-8530 宮崎市瀬頭 2-10-26 TEL0985-28-0600 FAX0985-22-5969 Mail rouso@sings.jp